

中国社会文化学会 2018年度大会

会場：東京大学文学部1番・2番大教室（法文2号館2階）

主催：中国社会科学学会 Tel:03-5841-3746, Fax:03-5841-3744, E-mail:shabun@hyper.ocn.ne.jp

参加費（シンポジウム資料代）1,000円 非会員の来聴歓迎

2018年7月7日（土）自由論題報告

第一会場 1番大教室 13:30~16:40

司会：吉澤 誠一郎（東京大学）

唐代茶税の功罪について —— 国家の変革と茶文化の変容への影響を中心に ——

……………趙 亜男（一橋大学大学院生）

コメンテーター：妹尾 達彦（中央大学）

つくられた始皇帝 —— 十~十三世紀における秦始皇帝像の変遷 —— 段 宇（学習院大学大学院生）

コメンテーター：田中 靖彦（実践女子大学）

天津におけるインフォーマル経済の社会主義改革 —— 「鬼市」から「天明市場」へ

……………櫻井 想（龍谷大学大学院生・国立民族学博物館特別共同利用研究員）

コメンテーター：吉澤 誠一郎（東京大学）

第二会場 2番大教室 14:35~16:40

司会：渡邊 義浩（早稲田大学）

十六字心伝と清代の荀子再評価、及びその思想史的意義 ……………張 瀛子（東京大学大学院生）

コメンテーター：石井 剛（東京大学）

再論 宋明知識人による風水思想の「発見」について ……………水口 拓寿（武蔵大学）

コメンテーター：須江 隆（日本大学）

会員総会 17:00~17:30 1番大教室

2018年7月8日（日）

シンポジウム 新たなデジタル化時代の中国研究

1番大教室 10:00~16:30

午前の部：10:00~12:15

総合司会・企画趣旨説明：川島 真（東京大学）

基調報告：10:15~12:15

1. デジタル化時代の人文学と日本における中国研究 ……………下田 正弘（東京大学）

2. デジタルアーカイブの連携拡張に向けた「ジャパンスーチ（仮称）」構想

……………山口 聡（国立国会図書館）

懇親昼食会 12:15~13:15 （2番大教室）〔会費1,000円〕

午後の部：13:15~16:30

個別報告：13:15~15:15

1. 漢籍デジタルアーカイブの持続可能性と相互運用性 ……………木村 麻衣子（慶應義塾大学）

2. 衛星画像データから復元した始皇帝陵の自然環境 ……………鶴間 和幸（学習院大学）

3. 中国・アジア研究論文データベースについて ……………石川 晶（科学技術振興機構）

4. 中国研究におけるアジ歴データベースの有用性 ……………大野 太幹（アジア歴史資料センター）

総合討論：15:30~16:30

基調報告・個別報告報告者

◆自由論題報告 第一会場 7月7日(土) 13:30~16:40 1番大教室

◇ 唐代茶税の功罪について —— 国家の変革と茶文化の変容への影響を中心に ——

趙 亜男

〔報告要旨〕本報告は唐代茶税の歴史を紹介した上で、国家の変革と茶文化の変容における茶税の功罪を考察するものである。安史の乱以降、国家政策による喫茶風習の普及と茶葉生産の拡大の背景の下で、軍事費の拡充や自然災害による減税の補填などを名目として徴収され始めた茶税が、唐末期の財政や政権、階級の変革と茶文化の変容に関わる記録が文献資料に散見される。しかし、唐代の茶税に関する研究のうち、制度的考察はほとんどであり、茶産地で頻発した農民戦争と茶文化の変容との関連による茶税の功罪はこれまで注目されていない。そこで本報告では、茶税が財政収入の補填に貢献を果たしたことや、藩鎮と朝廷両方の増徴で茶農家に対する搾取と農民戦争による社会の不安定ないし統治の動揺を招いたことに与えた影響を考察し、また茶の商品化を促進したにつれて、喫茶の風習を皇族・官僚などの上層階級に限られていた貴族文化から民間にまで広げられる庶民文化への世俗化傾向にも関わっていたことを明らかにしたい。

〔報告者紹介〕趙亜男(ちょう・あなん)、1986年生。専攻は東アジア文化史、主に茶文化史。中国河北大学外国語学部卒。現在、一橋大学大学院言語社会研究科修士課程在学。主要論文「唐代における茶文化の普及の原因について—国家政策の視点を中心に—」(『学芸国語国文学』50、2018年)など。

◇ つくられた始皇帝 —— 十~十三世紀における秦始皇帝像の変遷 —— 段 宇

〔報告要旨〕周知の通り、秦の始皇帝は歴史上の重要な人物である。名君の誉れ高かった半面があるが、非道な暴君としての姿でも語られている。秦始皇帝像は歴史を思考する主体の側の時代を反映する鮮明な時代性があるとされている。

九六〇年に趙宋政権が成立したから文治主義的な理念の国是化に伴い、始皇帝像は激しく変容したことがわかる。文化が咲いていた宋の時代に、秦始皇帝をめぐる議論は盛んであり、残された数多くの詩文に散見する。本報告では士大夫社会に形成した文献史料の分析を行うことで、秦の始皇帝像が変化した様相およびその原因を解明したい。

宋代に改良された儒学の影響範囲が広く、自国に限らず国境線を越えて、アジア世界に広まっていた。この時期にわたって、変遷しつつある秦の始皇帝像は周辺各国に伝え、東アジアでは集合的な記憶になった。

〔報告者紹介〕段宇(だん・う)、1986年生。専攻は宋代思想史。現在学習院大学大学院人文科学研究科博士後期課程在学。主要論文「遼宋之争：論真宗朝意識形態層面的角力—兼論宋代的秦朝觀之轉變—」(『杭州師範大学学報社会科学版』2017年第1期、2017年)、「宋代『金石学』の再評価—士大夫社会との接点からの一視座—」(学習院大学国際研究教育機構年報第3号、2017年)など。

◇ 天津におけるインフォーマル経済の社会主義改革 —— 「鬼市」から「天明市場」へ

櫻井 想

〔報告要旨〕本報告では、中華人民共和国(以下、中国と略称)成立から文化大革命までの期間を対象に、共産党政権がインフォーマルな商空間をどのように変革・統治したかを、天津の鬼市という市場を事例に考察をおこなう。

天津の鬼市は清朝末期に貧民が路上で古着を売り出したことに起源を持ち、民国期には夜明け前に盗品が売られる市場として近代天津史研究ではよく知られている。このようにインフォーマルな性格をもつ鬼市は、中国成立以後当局から取り締まりを受け「天明市場」

として一新したとされている。しかしながら具体的な研究はこれまでおこなわれてこなかった。本報告では、まず報告者の問題意識を提示する。次に、中国成立以後の商工業に対する社会主義改造の概要を確認する。そして、商業の中でも鬼市のように路上で物を売り生計を立ててきた攤販層がどのように管理されたかを具体的に考察する。

〔報告者紹介〕櫻井想(さくらい・そう)、1986年生。専攻は文化人類学。佛教大学文学部卒。現在龍谷大学国際文化学研究所博士課程在学、国立民族学博物館特別共同利用研究員。

◆自由論題報告 第二会場 7月7日(土) 14:35~16:40 2番大教室

◇ 十六字心伝と清代の荀子再評価、及びその思想史的意義 張 瀛子

〔報告要旨〕本報告には二つの論点がある。まず、従来、考証学が全盛期に達した乾隆嘉慶期より起こったとされる清代の荀子再評価は、実際、明末清初の閻若璩が著した『尚書古文疏証』まで遡るべきであること。同時にそれは、朱子学にとって重大な意味を持つ「十六字心伝」と密接に関わっており、単なる諸子学を超えた思想史的な意義を持っていることである。次に、このような荀子再評価は、清代「漢学」の開祖惠棟において、一つの到達点を迎えたと考えられる。従来、惠棟は一般的に思想性に欠けた清代考証学者の典型と見なされてきたが、彼の荀子読解は、このような見方とは対照的な思弁性を持っている。「聖人の微言」の正統な継承者として、荀子を思想面からも肯定するのであるが、実質それは惠棟が構築した新しい荀子像、彼自身の思想展開であり、「宋学」の相対化でもあった。このような惠棟の荀学は、清代考証学の複雑性を示す好例であると考えられる。

〔報告者紹介〕張瀛子(ちょう・えいこ)、1992年生。復旦大学新聞学卒。2018年3月、東京大学大学院人文社会系研究科東アジア思想文化修士課程卒業。現在、同専門分野博士課程在学。専攻は儒教思想。荀子を主な研究対象としながら、戦国時代から漢代に至るまでの礼思想を分析している。また、近代中国における諸子百家思想の再解釈にも関心がある。平成30年度日本学術振興会特別研究員(DC1)。

◇ 再論 宋明知識人による風水思想の「発見」について 水口拓寿

〔報告要旨〕2010年度大会で、「宋明知識人による風水思想の「発見」について：朱熹を焦点とする検討」と題する報告を行った。今回の報告では、宋明の儒教知識人が風水思想に関心を寄せ、各自の立場から否定や肯定を表明したという思想史的イベントについて、特に死者観、或いは遺体観という視角から再論し、その実情に一層忠実な理解をめざす。風水思想を全否定した司馬光も、肯定的姿勢を見せた程頤・朱熹や道学の後継者たちも、ありのままの風水思想に対して是非を述べたわけではない。宋代以前の風水思想は当時の民間信仰と軌を一にして、墓中の死者を人格的存在として畏れると共に、そうした死者の崇りに遭わないような埋葬のあり方を求めていたが、彼らは『司馬氏書儀』や『家礼』等において前提とされた、祖先と子孫の教条的な予定調和に即して風水思想を認知したのである。風水思想に関する彼らの言説の中で、墓中の死者は崇ることのない「枯骨」に変質していった。

〔報告者紹介〕水口拓寿(みなくち・たくじゅ)、1973年生。専攻は中国思想史(術数と儒教知識人の関わりを中心に)。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了、博士(文学)。現在、武蔵大学人文学部教授。これまでに著書『儒学から見た風水：宋から清に至る言説史』(風響社、2016年)、共編書『中国伝統社会における術数と思想』(汲古書院、同上)などを刊行。

シンポジウム 新たなデジタル化時代の中国研究

2018年7月8日(日) 10:00~16:30 1番大教室

企画の趣旨

本シンポジウムは近年顕著になっている中国研究の研究環境の変化、とりわけ新たなデジタル化時代の下での研究環境の変容について、そもそもその変化がどのようなもので、それによって何が可能になり、またどのような課題が生じているのか、ということを理解し、議論することを目的とする。

2017年9月に日本学術会議が発表した「新たな情報化時代の人文的アジア研究に向けて—対外発信の促進と持続可能な研究者養成—」という提言によれば、新たなデジタル化時代とは、以下のようなことを示す。すなわち、単に資料がデジタル化され、自宅でそれを見られるようになったことではなく、研究上の基礎資料(原典資料だけでなく、研究成果も含む)に関する大型のデータベースが創られ、それへのアクセスの可否が個々の研究者の研究活動を一定程度決定づけるような時代だという。

(<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-t247-10.pdf>)

確かに、世界の中国研究ではさまざまなデータベースが構築されている。CADALなどはその好例だろう。こうしたデータベースの利用者は日本国内でも少なくないが、同時にアクセス権が日本国内の図書館にはなく、海外にいてそれにアクセスしなければならないという例も見られる。こうした研究環境の変容が新たな研究の地平を切り拓くことは確かである。新たな発見もあろうし、作業効率も高まることになる。他方で、この変容は単に研究活動だけでなく、若手研究者の養成、ひいては教育現場にも影響する。たとえインターネットが普及していても、大型データベースへのアクセスが特定の図書館の端末に限定されれば、地域間、また階層間の研究環境に新たな格差を育むことにもなる。これらは学界にとっての新たな課題だろう。

いま一方、特に日本国内では、各機関が所蔵資料や研究成果のデジタル化じたいが課題になっている。またそれをデジタル化して公開したとしても、資料の所有主体がそれぞれその作業をおこなっているために、資料の全体像を把握しにくいという課題も存在する。そうした意味で、各機関のメタデータを集約・共有化し、どのような資料がどこにあるのかという情報(メタデータ・所在情報)を集約することが求められている。こうしたメタデータの共有化は、研究者にとってはきわめて有意義なことであり、研究を進める上での大きなインフラとなろう。今現在、どのような分野でそうした作業が進められ、そこで何が問題となっているのだろうか。これも学界にとって大きな課題として認識すべきことであろう。

こうした状況、問題関心にもとづき、本学会では、こうした新たなデジタル化時代の到来にともない、中国研究というこの学問領域がいかにかそれを受け止めるのか、あるいは関わるのかということについて議論していきたい。まず、基調報告者にどのような研究環境の変容が生じ、それにより何が可能になり、また課題となっているのかという点についてご紹介いただき、その上で各分野の報告者からその状況をご説明いただくことにしたい。

報告要旨

午前の部（基調報告）：10:00～12:15

デジタル化時代の人文学と日本における中国研究

下田 正弘（東京大学）

20 世紀後半より本格的化した情報通信技術革命は、人文系諸学に大きな影響を与え、基盤となる知識構築の方法から、研究の手法、成果の公開と交換の方法に至るまで、研究のほとんど全過程を変革しつつある。この状況下にあっいま研究者に求められているもの、それは、第一に、デジタル知識環境において提携すべき相手と提携の方法とを、個々の専門を超えた広い地平に踏み出して見出すことであり、第二に、個々の専門を成り立たせている諸条件を精査して、研究の特性と可能性とを把握しなおすことである。この普遍化と特殊化、あるいは一般化と専門化とが調和するとき、研究ネットワーク全体は力動的なものになる。この理解に立ち、本発表では、世界の中国研究における現在のデジタル化の状況を概観しつつ、日本における中国研究が今後も果たすであろう重要な役割について模索する。

デジタルアーカイブの連携拡張に向けた「ジャパンサーチ（仮称）」構想

山口 聡（国立国会図書館）

国立国会図書館は、深化型知識インフラの実現に向けて、多様なコンテンツのメタデータの統合的検索機能の提供を目指している。これまでは、国立国会図書館サーチを通じて、図書館をはじめとするさまざまな機関とのメタデータ連携に取り組んできたが、博物館・美術館等の図書館以外との連携は充分に進んだとは言いがたい。分野を横断した多様なコンテンツのメタデータの統合的検索機能を提供するためには、書籍に特化しない新たな仕組みが必要との認識に至った。また、国立国会図書館が目指すこの方向は、政府の「知的財産推進計画」等に基づくデジタルアーカイブ推進に向けた取組とも合致するものであり、内閣府をはじめとする関係省庁、主要アーカイブ機関等と協力して、新たに国の分野横断統合ポータル「ジャパンサーチ（仮称）」を開発することとした。ジャパンサーチ（仮称）の成功は、連携するアーカイブ機関のデジタルアーカイブ上で、いかにメタデータが流通しやすいライセンスで提供され、魅力あるデジタルコンテンツがオープンに公開されるかにかかっている。

午後の部（個別報告）：13:15～16:30

漢籍デジタルアーカイブの持続可能性と相互運用性

木村 麻衣子（慶應義塾大学）

現在、所蔵古典籍をデジタル化し、公開するデジタルアーカイブシステムを持つ文化・学術機関が増加している。一方、報告者が2017年に日本国内の文化・学術機関を対象に実施した質問紙調査（3,980 機関対象、有効回答率 41.73%）では、古典籍画像を含むデジタルアーカイブを運営していると回答した機関（269 機関）のうち、現在は更新停止中とした機関が 63 機関（運営機関の 24%）存在した。これらのシステムは、今後も永続的に画像を表示しつづけることができるだろうか。さらに、報告者による別の調査では、漢籍画像を含むデジタルアーカイブを運営中の機関が少なくとも 67 機関あることが確認されたが、書誌データのフォーマットには統一性がなく、漢籍書誌データの相互利用すなわち将来的な横断検索の実現には、相当の努力を要することが判明した。本報告では、上述の2つの調査結果を踏まえ、漢籍デジタルアーカイブの持続可能性と相互運用性を担保するために必要な要件を考察する。

衛星画像データから復元した始皇帝陵の自然環境

鶴間 和幸 (学習院大学)

中国史上最初に統一した秦の始皇帝の陵墓については、『史記』という文献史料に地下宮殿の様子が語られているが、考古学的には地下宮殿は未発掘であり、陵墓の周辺の陪葬坑、陪葬墓だけが発掘されている。私たちは東海大学情報技術センターと共同で、衛星画像データの分析から、始皇帝陵全体の自然環境を明らかにしてきた。その結果、文献史料や考古発掘では明らかにできなかった事実を確認することができた。始皇帝陵が驪山という山岳の北麓から渭水にいたる斜面の空間の中心に位置し、東西 10 キロメートルにも及ぶ壮大な陵園空間があったことがわかってきた。現代の最先端の科学が、古代の知られざる世界を明らかにしていくことができる。古代には明らかなことが、時間の経過とともに忘れ去られ、ごく一部の事実が文字に記録されていく。残された文字の記録も活用しながら、その外側の広大な世界を解明していくことに、歴史研究の新たな方向を見いだせる。

中国・アジア研究論文データベースについて

石川 晶 (科学技術振興機構)

2016 年 1 月に科学技術振興機構中国総合研究交流センターが運営する「中国・アジア研究論文データベース」が公開され、今年で 3 年目を迎えることになった。本データベースは JST が構築した日本の科学技術情報の電子ジャーナル出版を推進するプラットフォーム「J-STAGE」をベースに開発したもので、中国研究者のみならずメディアや一般企業などでも活用されているが、一層の発展が各方面から期待されている。

また、昨年日本学術会議提言「新たな情報化時代の人文的 アジア研究に向けて」でも本データベースについて触れられており、その役割の重要性がさらに高まっている。

本発表では「中国・アジア研究論文データベース」の開発経緯、学協会および個人による利用の方法、これまで利用状況とその傾向、今後の展望等について報告し、また当センターが運営する関連サービス、中国の学術データベースの現状、中国研究への支援体制等についても議論する。

中国研究におけるアジ歴データベースの有用性

大野 太幹 (アジア歴史資料センター)

中国研究の進展に関して、アジ歴データベースはいかに貢献できるのか。本報告では、国立公文書館・外交史料館・防衛研究所戦史研究センターが提供するアジ歴公開資料の中で、中国研究に資すると思われる資料群の概要を説明するとともに、アジ歴データベースの不足点を補完する上記 3 機関以外の諸機関とのリンクによる情報提供の現状についても紹介する。また、近年進めているアジ歴データベースの検索機能向上への取り組み、具体的には目録データの整備・拡充、より正確な検索を可能にするコンテンツの作成についても説明する。

上記に加え、国外諸機関との協力関係の一環として、波多野アジ歴センター長が委員に任命されている中国社会科学院近代史研究所・近代中国海外珍稀文献征集委員会の取り組み、台湾国家発展委員会檔案管理局が運営する横断検索プラットフォーム ACROSS へのアジ歴加入の経緯、その他各国のアーカイブ機関との交流などについても紹介する。

[シンポジウム報告者紹介]

◇下田 正弘 (しもだ まさひろ)

東京大学大学院人文社会系研究科教授。専門はインド学仏教学。古代インド仏教聖典の編纂過程を研究課題とするかたわら、大蔵経のデータベース化事業を中心に、デジタル環境での仏教学知識基盤の構築を進めてきた。現在、日本印度学仏教学会理事長、日本デジタル・ヒューマニティーズ学会会長、大蔵経テキストデータベース研究会 (SAT) 代表。

◇山口 聡 (やまぐち さとし)

国立国会図書館電子情報部電子情報企画課主査。2002 年国立国会図書館入館。調査及び立法考査局国会レファレンス課を経て、同局経済産業課でエネルギー分野の調査に従事。2016 年から電子情報部電子情報企画課において、デジタルアーカイブ連携、ジャパンリンクセンター (JaLC) 関連業務等を担当。

◇木村 麻衣子 (きむら まいこ)

慶應義塾大学文学部助教。2006 年より 2012 年 3 月まで慶應義塾大学メディアセンター(図書館)勤務。2015 年 3 月慶應義塾大学文学研究科図書館・情報学専攻後期博士課程単位取得退学。同年 11 月博士(図書館・情報学)。日本学術振興会特別研究員 RPD (東京大学東洋文化研究所) を経て 2018 年 4 月より慶應義塾大学文学部助教 (有期)。情報資源組織化を主たる研究テーマとし、現在は主に国内の漢籍書誌データに焦点を当てて研究を進めている。

◇鶴間 和幸 (つるま かずゆき)

学習院大学文学部教授。東京大学大学院人文学研究科博士課程単位取得退学、博士 (文学)。専門は中国古代史、主要著作は『秦帝国の形成と地域』(汲古書院、2013 年)、『ファーストエンペラーの遺産 秦漢帝国』(講談社、2004 年)、『始皇帝陵と兵馬俑』(講談社、2004 年)、『人間・始皇帝』(岩波書店、2015 年)、鶴間和幸・恵多谷雅弘監修・学習院大学東洋文化研究所・東海大学情報技術センター共編『宇宙と地下からのメッセージ～秦始皇帝陵とその自然環境』(D-CODE、2013 年)。

◇石川 晶 (いしかわ あきら)

独立行政法人(現・国立研究開発法人)科学技術振興機構 (JST) 中国総合研究交流センター(現・中国総合研究・さくらサイエンスセンター、CRCC)フェロー(現職)。2013 年 3 月 学習院大学大学院人文科学研究科史学専攻博士後期課程満期退学、同年 4 月より現職。中国の科学技術に関する調査・研究、ポータルサイト Science Portal China の編集、データベース事業、日中大学科学技術交流事業(日中大学フェア&フォーラム)、日本・アジア青少年サイエンス交流計画(さくらサイエンスプラン)等に従事。

◇大野 太幹 (おおの たいかん)

アジア歴史資料センター研究員。2011 年 4 月より現職。主要な論文として「支配の連続性と断絶性：満州国期における満鉄附属地の視点から」(『中国 21』No.31, 2009 年)、「アジア歴史資料センターの事業と公開資料の内容」(『アルケイア』8 号, 2014 年)、「The Present Situation in Field of South Manchurian Railway Company Studies」(『Asian Research Trend New Series』No.9, 2014 年)など。